

老人の日に思う

田村 正夫

予科4-6

航空6-4

(富士見市)



昨年の平成26年7月24日新潟の60期生暑気払いの会に参加した。新潟60期生会は組織的な活動は終わったが、機会あるごと懇親の会はつづいている。転居して7~8年になるが新潟の諸会合の案内をいただいている。この度の会に喜んで参加した。伊藤定市(32-9)代表以下8名、新潟の例会の伝統のとおり好きな酒を好きな量(自己の能力にあわせ)飲む宴会のやりかたで親しく歓談した、皆矍鑠として元気なものだった。

その中で驚異とも怪物ともいえる人物がいる。高山一夫君(28-10,歩兵1-1)だ。5回のガン手術で2回も「九死に一生」の経験をした体の持ち主である。これまで大病したにも関わらず病歴についてはあまり話そうとしなかったが、この度の会で詳しく語ってくれた。

1回目は平成10年「ガン」による腸閉塞手術、つづいて同じ年「九死に一生」といえる6時間もかかった大腸ガン摘出手術。引き続き3回目、転移した脾臓ガン手術あわせて胆嚢摘出手術。この3回の手術で半年以上もかかり歳のせいか大変苦痛だったとのこと。このとき褥瘡(床擦れ)で背中の方々に体の組織が壊死し卵大の穴が開き完治に1年半もかかった。そのときの痛みも普通でなかったと話していた。

その後5年なんともなければと案じてい

たが、4年半後平成14年膵臓ガン発症。膵臓手術だけでなく周りの臓器の脾臓全部摘出、腎臓の左腎臓摘出、十二指腸、空腸一部削除という7時間にも及ぶ大手術だった。退院して高齢にもかかわらず「九死に一生」の幸運に恵まれたとつくづく思ったとのことだった。

退院し健康回復したので新潟の月例会に出席するとのこと、病み上がりの弱々しいかっこうで出席するだろうから元気付けてやろうと思っていたら、真っ赤なプレーザ真っ白なズボンで颯爽と現れびっくり、ゴルフも続けてやっているとのこと。もうガンなど発症しないと医師に言われたとにこやかに語っていた。逆に参加した会員が元気付けられたことを想い出す。

さらに高山君は4年前の平成22年内臓でない足親指の付け根に皮膚ガン「悪性黒色腫」で即日入院手術。体を支えるのに一番大事な場所で全治に長時間かかったそうだが今元気。

5回のガン手術を体験し2回も死線乗り越え無事生還した高山君は、心臓と若干の内臓だけだが現在は健常者と変わらぬ日常生活を送っている。体力維持のためスイミングクラブとフィットネスクラブで年齢にあった適宜な運動をやっている。書道は師範級ゴルフの腕も上クラス、藝と趣味を生かした生き甲斐のある人生を送っているとのことである。

羨ましい。小生は白内障で両眼の水晶体を人工のレンズで部品交換。歯も数本部品交換、難聴で補聴器なしでは会話困難。内臓切除のような重症ではないが両膝関節軟骨磨滅して坂道階段の上り下りがつらい。血圧高め、前立腺肥大などで時には将来生きていくのに暗い気持ちになることがある。高山君を見習わなければならない。

「高齢者は自動車であれば中古車だ、どこか欠陥があり部品も交換している。しかし、

油をさしながら労わって運転すれば長持ちする、行く先を定め頑張ればまだ数万キロは走れる」と主治医に言われたことがある。仲間のなかには内臓摘出手術をされた方もおられるだろう、病を苦にして命を縮めるようなことなく、高山君を範とし気をしっかり持ち情熱の焦点を見失わず前向きに生きていこう。少なくとも東京オリンピック、パラリンピックまで、いや白寿に挑戦しよう。